

昭和四十九年 今立町農業委員 二期

昭和五十三年 山室部落区長

平成四年より今立中部土地改良組合理事二期目、現在に至る

(福井県 天谷 小之吉)

私の抑留体験記

滋賀県 橋 本 健二郎

私は大正十一年十一月滋賀県(現日野町)で農家の二男として生まれました。

昭和四年必佐尋常高等小学校に入學し、昭和十二年三月卒業後、東京の堀井膳寫堂に就職。

昭和十七年徴兵検査を受け、昭和十八年一月、歓呼の聲に送られて大分市西部第六八部隊に入隊しました。そこで三カ月の教育を受けて渡満、佳木斯^{ジャムス}の満州第八四六部隊(獨立守備歩兵第二四大隊)へ。

それから南叉^{ナシ}の三中隊に入りました。初めて見る大

陣、もう春だというのにそこはまだ零下の凍てつく寒さで、異国の空を眺めてしばし望郷の念にうたれました。

それから四月に入って各特業別に教育を受けるため分かれました。私は三中隊より一人、他の中隊の兵と一緒に富錦陸軍病院へ衛生兵教育のため派遣され、ここで六カ月の教育を受け、原隊に復帰しました。以後南叉三中隊医務室にて濱田軍医殿のもと先任衛生兵とともにしばらくは平穩な兵舎生活が続きました。

兵舎は、佳木斯の本部や一中隊は煉瓦造りでしたが三中隊は木造の二重の板張りで、周りは壕を掘った土で堀の方は盛られていました。

当八四六部隊の任務は満鉄の守備と沿線の治安維持であり、私は衛生兵として中隊の医務室勤務や演習訓練に参加しました。そして、任務の都合で各中隊駐屯地がバラバラで、三中隊は南叉にあり、帶領、小口等、分遣隊がありました。

昭和十九年八月、富錦^{フキン}の東南方二〇キロの所にある五頂山の麓の満軍兵舎に入り、任務も国境警備となり

日夜陣地構築に励みました。

二十年七月戦線縮小、その後部隊の編成替えがあり、我々は今何部隊やらわからず、ただ元の八四六部隊と
思い方正県大羅勒密グーラルミの山中に撤退移駐。伐採した木々
でにわか作りの家を建て、草で屋根を葺いて露営に等
しい兵舎にて起居、日中は陣地構築にあけくれる毎日
でした。

戦友達の中には異動と共に何人かは南方の方に回さ
れたらしく数も減り、装備も銃剣ぐらいのもので、た
だ仮想敵国ソ連が、いつ不可侵条約を破って攻めて来
るかわからないために陣地の構築をするのみでした。

昭和二十年八月のある日、急に非常呼集がかかり、
雨の夜中装具をまとめて方正の方へ山を下って行軍し
ました。まだ山を切り開いたばかりの道で凸凹もあり、
前の兵の背囊に白樺の皮をつけピカピカ光るのを目当
てに、幾時か、どこへ行くのか兵にはわからない行軍
でした。ようやく部落のある所まで出ましたが、噂に
はソ連軍が侵攻してきたらしく、部隊は方正に集結す
るらしい。またある噂には吉林まで撤退するのだとい

う話がありました、そのうちにソ連の飛行機が飛来、
爆弾投下し始めました。

いよいよ関東軍も一戦交えるときが来たかとみんな
覚悟をし、昼は山中を、また夜にも撤退の歩を休める
ことはありませんでしたが、いかんせん、ソ連軍の戦
車は大きく装甲も厚く、早い足で進撃してきましたか
ら我々はすぐ追いつかれました。

撤退の途中、軍馬の屍や誰が葬ったのか土まんじゅ
うの上に鉄兜が載っていた戦友の墓らしいものもあり、
また開拓団の方々も、関東軍の力なきためか、自ら刀
を背に馬車に鞭打って南の方へ逃避してゆく姿を目に
したりする。我々兵隊も、飛行機からの宣伝ビラ等も
投下され、デマかどうか惑わされました。まして終戦
の詔書とて知らずにいたのです。ソ連軍に追われつい
に方正近くで投降。しばらくは開拓団の部落が近くに
あり（開拓団は既に撤退していた）そこで過ごし、ソ
連兵に付き添われて野戦糧秣庫より支給を受けつつ、
ソ連軍の言う例の「トウキョウダモイ」の言葉を信用
しながら松花江を下るソ連の船を待っていました。

やがて方正の港だったと思いますが、千人単位で船に乗せられ松花江を下りました。蓮江口^{レンジャンコウ}の鉄橋も爆破されていました。

もう朝夕は涼しい九月に入った頃、黒竜江岸ビロビジャンに上陸、野外にて焚火をしながら今度は列車を待ちました。何時かしてソ連の貨物列車に乗せられました。進行方向を見ると小さな鉄格子の窓から西へ西へと列車の走るのを感じ、どうなることかと思いつつ身をまかせました。

イズベストコーワからなお森林鉄道のあるみずぼらしい駅に着き、行軍となりました（後でクレドールと知る）。何もわからぬ異国の地、北満にいて二年冬の寒さを経験してはいるものの、今敗戦の身となり、色々の事を考えつつ銃も剣もなく、ただ身につけたものを大事に山の方へ山の方へ入っていききました。奥に入るにつれ道も細く、どこへ行くのかわかりません。ようやくたどりついたのが小さなバラックの小屋、ただ寝るのみ。水は近くに小川があり、洗面炊事の用は足りました。その時この収容所に来た者は数十人だっ

たと思っています。

それから幾日もたたぬうちに、町の一一五収容所に転じました。ここは少し多くの兵が収容されており、佳木斯の陸軍病院の軍医さんや看護婦さんまでおられました（もちろん断髪軍服姿でした）。

初めの間は毎日焼けた山の掃除や収容所の中の施設整備で、我々は初めから労働をしなければということは思っていないませんでした。収容所はどこも丸太組みで屋根は板張りのお粗末なもの、寝台とて木造りの二段ベッド、電燈とてなく裸のカンテラで、油の油煙で朝には鼻の穴が黒くなっていました。

幾月かしてまた私は同じ町の一〇四収容所に移され、そしてここが私の抑留生活四年の館でした。約千人程であったでしょう。

某大尉が日本の隊長で、ナチャニック（所長）は大きい人でした。作業係の将校やら、収容所の四隅には監視の望楼があり夜は監視兵が立っています。周りは三重の有刺鉄線の柵が張られ、近づくとレールを切った鐘をカンカンと鳴らした。

一日の生活は、まず朝の点呼、五列に並んで守衛の兵が数えますが、これがなかなか手間がいるものでした。冬の寒い間はほんとうにつらく、それから作業。

食事は、初めは軍隊の飯盒をさげて実もないシャブシャブの汁をもらいするように飲みました。パンはどこも同じ黒パン、一日三五〇グラムでした。耳のついた固い方がかみしめるのに味があって歯ごたえがある。人間も動物と変わりのない。ソ連抑留生活になって初めて上下も貧富もない、ただただ生きるには食、餓鬼という言葉があるが、まさにその通り、食べられるものはなんでも口にするようになりました。今日の生活を思うとただただ涙、あわれ栄養失調で倒れて行った戦友を思うとき、もったいないという心が言葉として出てきます。

それにしても、この大戦にアメリカはまだ余裕があったのか、ソ連のシベリアの果てまでUSAのピカピカの缶詰が出回っていました。それに比べてソ連は、軍備は強かったのですが食糧事情は貧乏だったのでしょう。物資は満州より略奪したものばかりどんどん運

んで来ました。

さて、衣の方とて我々も着の身着の儘で、抑留後だんだんと衣服も破損して着替えもなくなりました。冬ともなれば防寒服なしで過ごせないのが囚人の服や帽子を着せられました。さすがソ連の兵隊さんらは羊の毛皮の外套や帽子を被っていました。我々は綿入れのジャンパーというか上着を着て作業に出ました。特に赤い星のついたトンガリの防寒帽を支給された時は情けなかったものです。

二年三年たって衣食住も少しはよくなったように思います。衣もちよつとは小ざれいになり、風呂に入るとき(週一回)脱衣場で脱いだ下着は洗濯され、デザメラ(火力乾燥滅菌室)に入れ消毒された下着を着衣場の方で着るといふシラミ等の対策がなされ、食もアメリカの缶詰の空缶で飯金のある兵士が上手に皿やスプーン碗を作って、食堂へは飯盒なしで行けるようになりました。

住の方も、収容所の建物に壁を塗って、上に石灰のとこした汁をハケで塗り、白い建物となりました。何

年目頃だったか売店さえ出来、ノルマの高い人は何ルーブルかもらえ、パンぐらいは買えるようになりました。そして正月には鯨の腹から数の子をとって三種の肴にお正月気分を味わいました。五月のメーデー、十月の革命記念日には休日で、楽しい日もありました。

一方、毎日の作業はノルマ達成のためソ連側から色々と指示され、作業隊長も大変だったようでした。第一、少量の食事に腹は満たされず、みんな栄養失調で我ながら骨がゴツゴツして見えてきた。歩む足もにぶかったが、言われるままに初めは伐採作業や鉄道の建設の方や保線作業、貨物の積み下ろし——この作業では、食べるものの場合ちょっと失敬して腹に巻いたり長靴の中に隠して持ち帰り頂けるのが楽しみでした。しかし、衛門で検査に引っかけたりしたこともありました。

クレドールの駅の前の埋立作業は割合長く続きました。木の箱に鉄の一輪車のついたターチカ、いわゆる現在の一輪車で、山を発破で壊しては積み込み、足場板の上を走って低い谷のような所へ運びました。この

ノルマが毎日何回と決まっており、みんな使い易い一輪車やスコップを取り合いしたりして頑張ったこともありました。お昼頃になると、遙か遠い収容所の方から牛の車にスープを積んで来るのを今か今かと待ったものでした。毎朝の点呼時には、ノルマの達成票があつてスタハノフ（ソ連の成績のいい労働者）に続けとアジが飛んだものでした。

前にも述べたようにノルマが高い人は表彰され、幾らかの賃金がもらえるようになりました。ノルマも食ノルマと作業ノルマがあったと思います。身体検査と言ってもお尻の肉付きを見るくらいでしたが、これによって一級、二級、三級、オカと決められ、それによってノルマも多少格差はつけられました。

私も一度三級になって、作業もサナトリウム等の掃除や馬鈴薯の皮むきをしたこともありましたが（クレドールの街はシベリアでは珍しい温泉の湧く所があり、軍用・民間用のサナトリウム等がありました）。

私も身体は弱い方であつたと思つていましたが、現役入隊で若かつたおかげか、大した病氣もせずどうに

か抑留生活を過ごして来られたことを幸せと思っています。病に倒れ作業で傷ついた兵も沢山いましたが、どこかの病院に入院され、よくなられても元の収容所へ帰って来られた話は聞きませんでした。

ほんとうにソ連の人事は、同じ部隊にいた者がいつの間にか別れて、元の部隊で、一緒にずっと過ごした人は誰もいません。でもいつの間にか互いに励まし、なぐさめ、語り合って、最後の悲願である日本帰還の心は片時も忘れることなく、そのみがつらさに打ち勝って生きて行く一つの支えであったのです。

まだいろいろ書くこともあります。収容所における共産主義の教育や民主運動という名によって戦友同士をつるし上げにするような活動をし、二十四年の引揚げには「筋金入り」とか「日の丸部隊」と共産党の宣伝に躍らされて上陸した時代でした。

帰還の知らせはクレドール一〇四収容所で氷雪も溶けた六月下旬の頃でした。この年ぐらいになっていつの間にか収容所の人数も減ってきたようでした。みんな集まった所で帰還（ダモイ）の名前が発表されました。

た。今度こそと耳をたてて自分の名前を呼ばれるのを待ちました。

だれも自分の名前を呼ばれた時はうれし涙が出ました。苦しかったことの多かった抑留生活ながら、今ではもう忘れ、帰れるといううれしさは筆舌に尽くせないくらいでした。

さて別れるとなるとやっぱり人と人、入ソ当時と違い四年後の今はお互いになじんできて、異国の地にあつて人種民族は違つても、ソ連の女子、子供まで別れるにあつてはヤポンスキーダスビダーニヤ（日本人さようなら）と家々から見送ってくれました。

途中の沿線では所々まだ日本兵が働いていて、手を振ってくれました。ナホトカの収容所での検査も無事すみ乗船、一路眼にしみるような碧い日本海を舞鶴に七月三日か四日に上陸、七月七日懐かしの故郷に着きました。

しばらく休養し、さて就職となるとどこへ行っても駄目でした。家が農家のため食べさせてもらい、家の仕事も手伝いながら仕事探しにあけくれました。これ

も敗戦のみじめさであり、長年の空白で何もかも浦島太郎のようでした。

戦後五十二年、この文を書きながら、あの大戦による多くの亡くなった戦友のことを思い、また異国の丘にて名もなく散ってゆかれた友を思う時、二度と戦争はするものでない、平和の尊さを今かみしめながら、ご冥福をお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

筆者は大正十一年十一月五日、北比都佐村に父辰之助さん、母つねさんの二男として生まれました。北比都佐尋常高等小学校を卒業され、堀井膳写堂（近江商人）東京店に就職。

昭和十八年一月十日、現役兵として大分市西部第六八部隊に入隊。厳しい三カ月教育を受け渡満。軍隊当時は上官及び戦友の信頼も厚く、兵役に精励された。

ソ連参戦により三江省方正県方正で終戦、二十年九月入ソ。イズベストコフヤのラーゲルで、厳寒の上地で種々の労働に服される。

二十四年七月三日舞鶴に上陸、復員。

農業を営みながら近くの酒造会社にも勤勞十五年間。その後TOTO株式会社に転職、六十歳退職。農業に従事。

その間、温厚なる人柄のため人望も厚く、地域の農業組合長等を務められ、現在は必佐（北比都佐）老人クラブ副会長の職にあり、老人福祉の向上に働いておられる。家族は長男の幸一さんが頑張っておられ、孫の成長の楽しみと、なき戦友の冥福を祈りつつ、感謝の日々を送っておられる。

（滋賀県 堀江 芳郎）

抑留の労苦を踏み越えて

和歌山県 出口 為治郎

まえがき

我が国においては今から半世紀前までは、男は国民皆兵制度に従い、富国強兵を唱え、軍人として支那大